



ドクター板東の メディカルリサーチ

～桜から 命を深く 考える～

Vol. 77

<http://pianomed-mr.jp/>

春は桜の季節。ちょうど満開の頃、私が滞在していたのは京都。それも、よく学会が行われる国際会議場ではなく、平安神宮のすぐ横であった。(図1)。

京都市勧業館「みやこめつせ」で開催されたのは、日本内科学会(図2)。なぜ、会頭の先生がここを選んだのだろうか、不思議に感じていた。だが、足を踏み入れてみて、その理由がわかつた気がした。

おそらく、京都大学教授の学会長によるご配慮と思われる。4月中旬というぴつたりのタイミングで、桜や芸術文化、歴史を全国から参集する方々に楽しんでほしいと考えたからであろう。本学会は今までとは異なり、医学・医療・文化の深さを備えていたように思う。

内科学の使命と挑戦

本学会で、聴衆の多くが期待していたシンポジウムがある。学会テーマと同じ「内科学の使命と挑戦」である。会場は満員で、サテ

ライト会場も人で溢れるこ

とに。4名の著明な先生方がお話をされた。

最初に登壇されたのは、いつもご指導を賜っている聖路加国際病院の日野原先生。大学時代はここで過ごされ、大病で半年ベッド上で動けない時期もあったが、精神力で克服された。いまや100歳の内科医として、日本中に知られ、「新老人の会」も主催されている。

先生は、医学や医療の歴史、臨床教育を受けたオースラーブ博士による臨床教育、リベルアルアーツ(人間教育)の重要性などについて触れられた。

続いて、京都大学名誉教



図1

授の井村裕夫博士が、近年における医学の発展について概説された。

その次のシンポジストに、私たちは新鮮な驚きを感じた。宗教学者で前日本文化研究センター所長の山折哲雄先生が、生と死について解説。ご自身が入院し一週間絶食の体験に触れ、ここから、西行法師が詠んだ有名な和歌に、話を発展させたのである。

「願わくは 花のもとにて
春死なむ その如月の 望月
の頃」。花とは桜を意味しており、旧暦の2月中旬とは、今でいう4月初旬に相当するものだ。

ここで、西行は次第に食事を制限し、絶食から絶飲し、自分の命をコントロールしたと思われる証拠を紹介した。ちょうど仏陀が滅した同日ではなく翌日に旅だったとされ、医学的、文化的、宗教学的視点から深淵な分析や解釈に感服した次第であった。

最後の演者は、内科医で、エッセイストでもあられる徳永進先生。ホスピスケアに従事されて長く、その穏やかな中に含まれるウイットに微笑んでしまう。

中でも、山折先生は西行の真似をするんじゃないのか? 日野原先生はずつと死なんないんじゃないか、というコメントには脱帽。

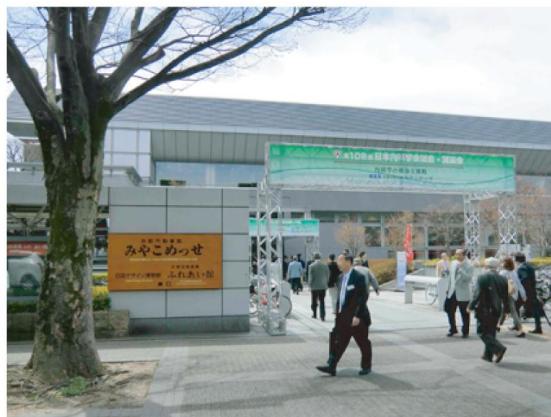


図2



第109回日本内科学会総会・講演会

パネルディスカッション
内科学の使命と挑戦

1. 内科学の歴史と使命

聖路加国際病院理事長 日野原 重明

我が国の臨床的研究

医学には2つの潮流があり、ドイツ系とイギリス系がある。日本はドイツを選択したため、歴史的に基礎医学を偏重する傾向があった。具体例を表に示したので、国の対応について考えてみていただきたい。

一方、イギリスやアメリ

カ医学は臨床医学を重要視してきた。そのため、患者志向型の医療が発展するごとに。日本の医療もこの方向に変貌しつつある。

琵琶湖疏水建設

医学の歴史は政治経済の発展とも密接に関わっている



図4

表 我が国における臨床的研究

★医学の2つの潮流

①ドイツ医学

基礎研究重視

病気の原因を追及するため

研究的な色彩が強いのが特徴

②イギリス医学

臨床研究重視

病気の原因を究明するよりも、予防法の確立を重視する実証的医学

★高木兼寛が我が国で最初の臨床試験

脚気の研究を進めていた(1883)。

同じ航路の2隻(龍驤艦・筑波艦)で

乗員の脚気の罹患数と死亡者数を比較

①龍驤艦: 米食中心、低蛋白、高炭水化物

多数の脚気患者あり

②筑波艦: 麦食導入で高蛋白、低炭水化物

として介入試験を実施

乗員数、航路、航海日数はほぼ同じ

我が国初の優れた臨床試験であった。

★2つの船で大きな差異

航海後の脚気の発生率については

- ①龍驤艦が41%
- ②筑波艦が4%

これほど大きな差異が認められたが、現場では、麦食導入の試み全くなし。

★陸軍と海軍における脚気の被害

①陸軍

日清戦争: 戦死者293名

脚氣で死亡 3944名

②海軍

日露戦争: 戦死者47000名

脚氣で死亡 27800名

★大きな差異があるが、変革なし

これだけの差異が認められたが、陸軍(基礎研究)から反発あり

無作為試験ではない

・当時、東大の教授が脚気菌を発見?

・麦より白米の栄養価がはるかに高い。

・白米の吸収もはるかによい。

・陸軍の兵食は白米から変更必要なし

★サマリーと将来

以上の歴史的史実から何を学び、どのように、私たちは考え、今後、何をすべきであろうか?

インクライン

エクトは無理だつたかもしれない(図6)。肩書きよりも実行可能性が重要だ。

記念館に隣接して、インクライン(傾斜鉄道)がある(図7)。この線路の

上を、台車に船を乗せ、ウ

インチで巻き上げて、船を

上流に運んでいたのである。

今回は従来と異なり、京

都で医学や医療、歴史、文

化、政経などの視点から広

く学ぶことができた。我々

は、日本古来の長所を伸ば

しながら弱点を改善し、病

気・病人・地域・国といふ

各レベルで、治していくかねばならないと思う。

る。学会長が示したのが「琵琶湖疏水建設」。大事業を成功させたのは、当時の北垣国道知事と、東大卒のエリート技師・田邊朔郎氏であつた(図4)。

ちょうど学会場近くの記

念館を訪問し(図5)、20歳代の田邊を抜擢しすべて任せた知事の英断を知ることができた。もし、年功序列で年配者を責任者にしていたら、琵琶湖の水を京都まで運ぶという大プロジェクト

(板東浩、ばんどうひろし、医学博士、糖尿病専門医、ピアニスト)



図6

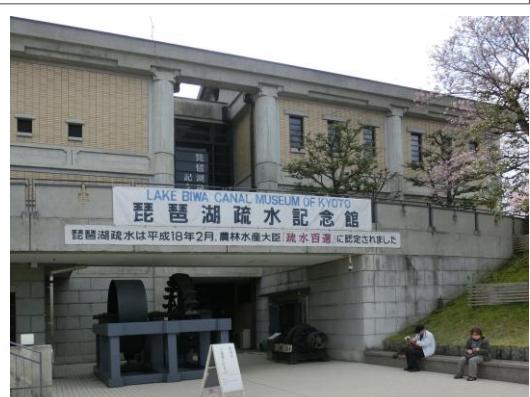


図5



図7